様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ９ 月 １５ 日現在

機関番号：３０１０７
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2017
課題番号：２６７５０３５２

研究課題名（和文）完全主義、情報源の種類、情報収集の仕方が育児情報環境評価と適応に与える影響

研究課題名（英文）The influence of perfectionism, kinds of information sources and information gathering behavior on evaluation of the childcare information environment and adaptation

研究代表者
古谷　嘉一郎（Furutani, Kaichiro）

北海学園大学・経営学部・講師

研究者番号：８０４６１３０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では完全主義、情報源の種類、情報収集の仕方が育児情報環境評価と適応に与える影響を検討した。特に、完全主義的努力と完全主義的懸念の影響に着目した。
主な結果として、１．完全主義的懸念は適応を悪化させる。２．完全主義的努力は情報収集量を規定する。３．完全主義的懸念と完全主義的努力の両者が高い者は、受容的サポートや情緒的サポートを受けても、不適応になる可能性がある。４．完全主義的懸念は不確かさに対する不寛容性を媒介して適応に影響を与えている。

研究成果の概要（英文）：I examined the effects of perfectionism, kinds of information sources and information gathering behavior on evaluation of the childcare information environment and adaptation.
In the survey, I focused on perfectionistic striving and perfectionistic concern.
1. perfectionistic concern than perfectionistic striving have a negative effect on adaptation. 2. perfectionistic striving have a positive effect on quantity of information seeking. 3. the person of both high perfectionistic striving and perfectionistic concerns, even though they received social support, are maladaptive. 4. intolerance of uncertainty has mediating role on between perfectionic concerns and psychological maladjustment.

研究分野：社会心理学

キーワード：完全主義　完全主義的努力　完全主義的懸念　適応　精神的健康　サポート　バーンアウト

１．研究開始当初の背景

次世代社会の担い手となる子どもの健全な育成については多くの議論がなされているものの、種々の問題が複雑に絡み合い、突破口が見いだしにくい状況である。

このような子どもの健全育成に関わる問題について科研費研究(H22-24 基盤C(分担)「育児環境における情報収集過程と個人特性が養育者の心理的適応に及ぼす影響機序の解明」）において、インターネット利用と地域からの情報収集行動が適応に及ぼす影響を検討した（古谷ら，2012)。

その結果、地域や、PCで育児情報収集している者ほど、子育て情報環境をポジティブに評価する一方、スマートホンや携帯電話での育児情報収集している者ほど、子育て環境を重荷と評価していた。また、育児展望が低く、うつ傾向が高いことが明らかになった。

さらにその傾向は、完全主義の高さによって調整されることも明らかになった。つまり、完全主義傾向が育児情報収集行動と適応の関連を調整している可能性が示唆されたと言える。

その一方で、完全主義はサポート受領を媒介し、適応に及ぼすことも指摘されている(Sherry et al., 2008; Molnar et al., 2012; Casale et al., 2014)。これらの先行研究によれば、完全主義が高い人ほどサポートの受領が少ないために不適応であるという。

加えて、完全主義者はその独特の行動傾向や認知傾向が指摘されている（e. g., Stoeber, 2017; Harris, Pepper, & Maack, 2008;)。これらの傾向が適応に及ぼす影響についても、考慮を行い検討を行う

２．研究の目的

以上の議論を背景とし、完全主義が育児情報収集、適応に及ぼす影響を明らかにすることが本研究の目的である。

３．研究の方法

主として調査会社への業務委託によるインターネット調査による検討を行った。この理由として、育児中の母親のサンプリングの難しさが挙げられた。

４．研究成果

古谷（2015a）

完全主義傾向の人は完璧な確信を得るために過度の情報収集行動を行うことが、実験的に検討されている（小堀・丹野，2005; Koboeri＆Tannno, 2008; 増井・岩永, 2009)。

先行研究を受け、本研究では、子育て中の養育者を対象にした調査を実施し、完全主義が情報収集行動に及ぼす影響を検討する。ここでは、個人特性としての自己志向的完全主義、子育てに関わる完全主義である子育て完全主義､完全主義認知の3種類を取り上げる。

【方法】調査時期・調査対象者　2014年8月時点において、就学前の子どもを育てている母親600名（平均年齢34.71歳）歳；楽天リサーチによる web 調査)。調査項目群　多次元自己志向的完全主義尺度（桜井・大谷，1997）を5件法20項目で測定した。完全主義認知尺度（小堀, 2004）4件法（1：全くなかった（0 日）～4：いつもあった（10～14日)）15 項目。教示文は、子育てに限定したものに変えて測定した。子育て完全主義尺度（三重野・濱口，2005）5件法、各因子（自己志向、社会規定的、子ども志向的）5項目、計15項目で測定した｡情報収集行動　日頃、子育てに関する情報をどの程度得ているかについて複数の情報源を提示して尋ねた。6件法（1：全く得ていない～6：非常に得ている）13項目（例　自分の夫から、自分が住んでいる地域の人々から、育児に関する施設や託児所・子育て支援センターから、インターネットから)。また、年齢、育てている就学前の子どもの人数(以降､児童数)を尋ねた。

【結果】情報収集行動について主成分分析を行い、1因子構造と判断した（α = .78)。情報収集行動を目的変数、児童数を統制変数とし、自己志向的完全主義の4因子ならびに交互作用項を説明変数とする階層的重回帰分析を行った。その結果、Step1 において児童数で正の関連傾向（β = .10, p < .10)、自分に高い目標を課す傾向と情報収集行動に正の関連（β = .22, p < .01）が、ミスを過度に気にする傾向と情報収集行動に負の関連（β = -.14, p < .01）が認められた(R2 = .064, p <. 01)。Step2 以降のモデルは有意でなかった。

完全主義認知3因子、交互作用項を説明変数とする階層的重回帰分析を行った。情報収集行動と児童数、高目標設置で正の関連、完全性追求との間に負の関連が認められた。加えて交互作用項が認められた。ここでは、2次の交互作用項について述べる。まず、どの群においても、高目標設置が高い人ほど情報収集行動を行うことが示された（ps < .01)。また、高目標設置が低く、ミスへのとらわれが低い人の中では、完全性追及が高い人ほど情報収集をしないことが示された（β = -.41, p < .01 Figure1 上点線)。なお、完全主義認知の得点が低いことを考慮し、平均値の分布を確認した上で、完全主義認知低群・高群とダミー変数化した場合の分析においても同様の結果が認められた。

【考察】　自己志向的完全主義についての結果は予測を支持するものであった。一方、完全性追求の認知と情報収集行動には負の関連が認められた。この結果は予測を支持しなかった。さらに、交互作用項の結果から、この傾向は他の完全主義認知が低い人で顕著であることが明らかになった。すべての完全主義が低い人の場合、「育児のための質の高い情報を完璧に集めなければならない」という考えが弱いことで、完全性追求が高い人に比べて情報の質に関わらずに一定量の情報を集めたのかもしれない。

また、他 2 種類の完全主義認知の程度に関わらず、高目標設置が高い人は情報を多く集めていたことから、高目標設置が情報収集量を規定する変数であることが示された。

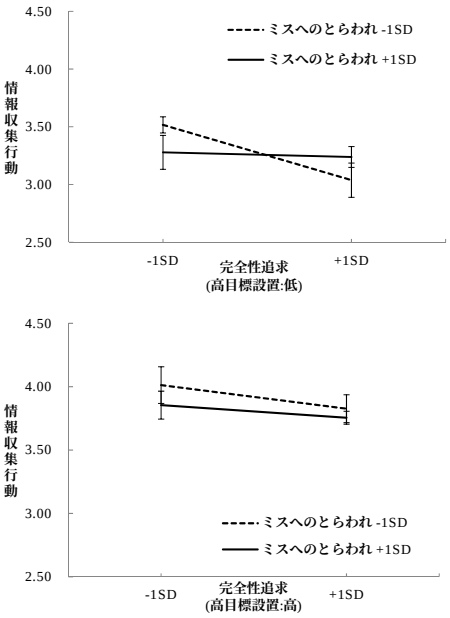

Figure 1　完全主義認知が情報収集行動に及ぼす影響

古谷（2015b）

【問題】　完全主義傾向の人は完璧な確信を得るために過度の情報収集行動を行うことが、実験的に検討されている（小堀・丹野，2005; Kobori & Tanno, 2008; 増井・岩永，2009）。小堀・丹野（2005）は、安定したセルフスキーマである完全主義認知と情報収集行動の関連を実験的に検討している。そして、自己志向的完全主義が低い者と比べ、高い者のほうが重要と考えられる情報を収集する傾向にあることが指摘されている(増井・岩永，2009)。これらの結果から、特性としての完全主義、認知スキーマとしての完全主義認知の両者が過度の情報収集行動の規定要因である可能性が指摘できる。

先行研究を受け、本研究では、子育て中の養育者を対象にした調査を実施し、完全主義認知が過度の情報収集行動に及ぼす影響を検討する。個々人の完全主義的な傾向でなく、完全主義的な認知がどの程度生起したかどうかが実際の情報収集行動に及ぼす影響を探るためである。

さらに本研究では、分析手法として重回帰分析と分位点回帰分析に着目した検討を行う。この理由として、「過度」の情報収集行動を規定する要因を検討するに当たり、重回帰分析と分位点回帰分析により、異なる結果の可能性が示唆されるためである。

【方法】　調査時期・調査対象者　2014 年 8 月時点において、就学前の子どもを育てている母親 600 名（平均年齢 34.71 歳）；楽天リサーチによる web 調査)。調査項目群　完全主義認知尺度（小堀, 2004）4 件法（1：全くなかった（0 日）～4：いつもあった（10～14 日））15 項目。教示文は、子育てに限定したものに変えて測定した。情報収集行動　日頃、子育てに関する情報をどの程度得ているかについて複数の情報源を提示して尋ねた。6 件法（1：全く得ていない～6：非常に得ている）13 項目（例　自分の夫から、自分が住んでいる地域の人々から、育児に関する施設や託児所・子育て支援センターから、インターネットから)。また、年齢、育てている就学前の子どもの人数を尋ねた。

【結果と考察】　10 パーセンタイル刻みに情報行動収集尺度の分位点の値を算出した結果、1.31、2.77、3.08、3.31、3.54、3.77、3.92、4.23、4.54 となった。

情報収集行動を目的変数とする重回帰分析を実施した。また、情報収集行動を目的変数とする分位点回帰分析を Stata IC ver 14.0 を用いて実施した。石黒（2011）に従い、ブートストラップ法の分析結果の再現性を確保するため、乱数の初期シードを set seed コマンドを用いて、12345 に固定し、繰り返し数を 2000 とした。そして、sqreg コマンドを用いた。

中央値を目的変数とした分位点回帰分析の結果を確認すると、重回帰分析の結果とほぼ同様であった。特に、育てている未就学児童の数や高目標設置を認知した回数と正の関連、完全性追求を認知した回数と負の関連傾向にあった。しかしながら、q60 から q90 においては完全性追求の影響が認めらなかった。さらに、q90 では、育てている未就学児童数の影響も認められなかった。なお、係数の差の検定を行ったが、有意な係数差は認められなかった。これらの結果から、情報収集が少ない人たちにとって、完全性追求は抑制要因となる一方で、情報収集がある一定の程度を超えると無くなることも明らかになった。この結果から、情報収集行動を促進する完全主義の要素は完全性追求であることが明らかになった。

古谷（2016a）

【問題】子育ての主体となりやすい母親に着目し、合理的サポートが適応に及ぼす影響について、完全主義を考慮した検討を行う。子育てにおいて、周りからのサポートは有益な効果をもたらすことであることが多い。しかしながら、サポートが望ましくない効果をもたらす場合もある。本研究では、受容的サポート（長沼・浦，2005）の影響について、提供源と完全主義の観点から明らかにする。

【結果と考察】　各尺度において、項目分析を行い、先行研究と同等であることを確認した。しかし、育児バーンアウトについては因子分析の結果、情緒的消耗感と報われない気持ちの 2 因子と判断した。そして、古谷(2016)に従い、完全主義の高目標設置／失敗過敏の因子得点をもとに高・低群に分類した後、不

健康的完全主義者、健康的完全主義者、非完全主義者に分類した。この分類別に情緒的消耗感、うつ感情、孤独感得点を目的変数とし、説明変数を年齢、就学前の子どもの数、各受容的サポートの得点とした多変量重回帰分析を行った。

不健康的完全主義者（Table1）では、ネット受容的サポートと情緒的消耗感・孤独感の間、ママ友受容的サポートと報われない気持ちの間に正の関連があった。また、夫の受容的サポートと孤独感に負の関連傾向があった。つまり、ママ友から受容的サポートを受けることで惨めな気持ちを感じてしまうのである。しかしながら、パートナーである夫からのサポートは、孤独感を低減させる可能性がある。このサポート受領の解釈の違いが適応に及ぼす過程を明らかにすることが、子育て中の母親に対する望ましいサポートシステムの構築につながるといえる。

Table.1　不健康的完全主義者における受容的サポートの影響

	情緒的消耗感	報われない気持ち	孤独感
年齢	-.11	-.06	.01
子どもの数	.23 +	.05	.15
受容的SP：夫	-.22	-.14	-.24 +
受容的SP：親	-.12	-.10	-.13
受容的SP：夫親	-.07	.12	.05
受容的SP：ママ友	.06	.27 *	-.10
受容的SP：ネット	.38 **	.16	.36 *
R^2	.17 **	.14 **	.14 **

$^{*}p < .01, ^{*}p < .05, ^{+}p < .10$

古谷（2018）

【問題】　古谷（2016a）では、社会的サポート(以下 SP)が養育者のバーンアウトや孤独感に及ぼす影響について、完全主義の分類（Stoeber & Otto, 2006; 健康的完全主義、不健康的完全主義、非完全主義）を調整変数として検討した。

しかしながら、Stoeber (in press)は、完全主義的努力（PS）と完全主義的懸念(PC)の 2 概念に基づく 4 分類（e. g., Gaudreau & Thompson., 2010）で検討を行うことが有益であることも指摘している。そこで、本研究では PS と PC ならびに社会的 SP が親バーンアウトに及ぼす影響を明らかにする。

【結果】　完全主義尺度から PS に対応する高目標、PC に対応するミスを気にする傾向の項目を選択し、CFA を行った。適合度指標に基づき、1 項目を除き 2 因子が妥当であると判断した（CFI = .898, RMSEA = .096）。次に SP 項目が道具、情緒、合理的の 3 因子を確認した（CFI = .934、RMSEA = .106）。なお、今回は紙面の都合上、道具と情緒の結果を報告する。バーンアウトも CFA から、身体的消耗感（例　体が疲れ果てる）、情緒的消耗感（例　精神的に参ってしまう）、報われない気持ち（例　惨めな気持ちになる）の 3 因子が妥当と判断した（CFI = .989, RMSEA = .051）。

説明変数を SP 下位因子の道具、情緒 2 因子のいずれか、PS、PC とその交互作用項(1 次、2 次)、統制変数を年齢、就学前の子供の人数（以降人数）、目的変数をバーンアウトの各指標とする階層的重回帰分析を行った。まず、道具的 SP の影響について確認する。3 要因交互作用項(p < .10)傾向が示された。

次に、情緒的 SP の影響である。3 要因の交互作用項(ps < .05）が有意であった。3 要因の交互作用の単純傾斜を確認すると、PC 高群の人は SP をもらえるほど身体的消耗感が低い(ps < .01)ことが明らかになった。さらに、PS 低群において、SP をもらっている人は PC が高いほど身体的消耗感が低かった。そして、PC 低群において、SP をもらっていない人/もらっている人は PS が高いほど身体的消耗感が有意に高い/高い傾向があることが明らかになった。また、PC 高群においても SP をもらっている人は PS が高いほど身体的消耗感が有意に高いことも明らかになった。情緒的消耗感(Step3 R2 =.093, p < .01)では、Step3 の増分が有意傾向(ΔR2 =.010, p < .10)であり、SP(β = -.29, p < .01)、人数、PS、PC(β =.21, .19, .17, ps < .10)が影響の傾向を示した。加えて、3 要因の交互作用項の有意傾向(p < .10)が認められた。単純傾斜を確認すると、PC 高群において、SP をもらっているほど情緒的消耗感が低い(ps < .05)、SP 受領が少ない人は PS が高いほど情緒的消耗感が高い傾向、PC が高く、SP をもらっている人は PS が低いほど情緒的消耗感が低い傾向にあることが示された。最後に報われない気持ち(Step3 R2 =.15, p < .01)についても Step3 の増分が有意傾向(ΔR2 =.010, p < .10)であり、年齢、PC(β = -.02, .48, ps < .05)、SP(β= -.15, p < .10)が影響していた。さらに、3 要因の交互作用項が有意傾向であった。PS が低く、PC が高い人は SP をもらっているほど報われない気持ちが低いこと、PS が低く、SP をもらっていない人は PC が高いほど報われない気持ちが強いこと、PS が高い人は PC が高いほど報われない気持ちが強い(ps <. 05)ことが示された。

【考察】　主効果の結果、SP と PC は予測をほぼ支持するものであった。SP が消耗感の緩和要因になりえることが明らかになった。さらに、PC が高い人は、育児でミスをしてはいけないという思いが強いため、PC が低い人に比べて育児での失敗に反応しやすく、情緒的に消耗し、報われない気持ちを強めてしまうのだろう。一方で PS が高い人は、より質の高い育児を進めようと頑張る結果、身体的な消耗感を高めてしまう可能性が考えられる。3 要因の交互作用の結果を確認すると最も不適応であると考えられる健康的完全主義者（PS 高・PC 高）において、道具的、情緒的

SP の提供は身体的／情緒的消耗感を低める可能性が示された。この結果は SP 提供が養育者のバーンアウト、特に消耗感に効果的であることを示すといえる。

情緒的 SP が報われない気持ちに与える影響を確認すると、PS が低く、PC が高い人のみで効果が認められた。この人たちは失敗やミスに対して敏感であり、回避的な動機づけを有している一方、接近的な動機づけは有していない（古谷，2016）。そういった人達の気持ちを和らげるには、具体的な問題解決よりも、気持ちに寄り添う情緒的 SP が効果的であるといえる。

しかしながら、不健康的完全主義者の報われない気持ちにおいては情緒的 SP の効果が認められなかった。SP をもらった後、ポジティブ・ネガティブ両方の解釈により、SP の効果を打ち消した可能性がある。このため、SP 受領後の解釈過程に着目した検討を行うことが今後の課題である。

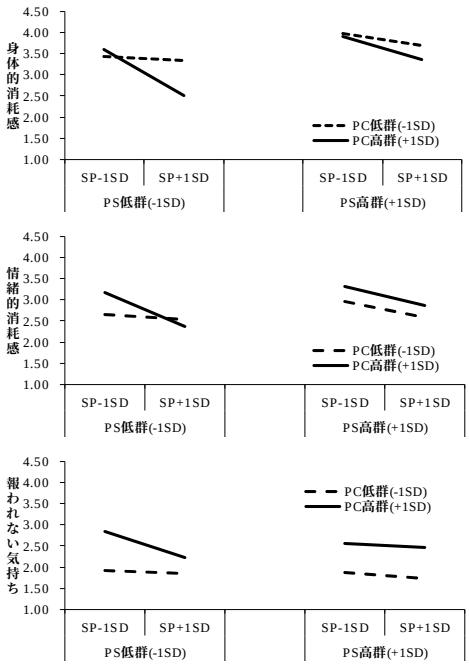

Figure 2　PS、PC、情緒的 SP がバーンアウトにおよぼす影響

Kawamoto & Furutani (2018)

【問題】　物事を完璧に行うことは望ましいことだが、失敗を多く感じることにもつながる。このように完全主義は比較的適応的な側面と不適応的な側面の両方を持ち合わせている。本研究では，完全主義と精神的健康との関連について、子育て中の母親を対象とした調査を行った。また、両者の関連を媒介する要因として不確実さ不耐性に着目した。

不確実さ不耐性は、曖昧・不確かな状況を脅威だと知覚・解釈する傾向を意味し(e.g., Dugas et al., 2005; Dugas, Schwartz, & Francis, 2004)。不確実さ不耐性は、心配・不安・抑うつといった精神的健康の脆弱要因として捉えられている。子育ては不確実なことが多く、不確実さに対する認知傾向は精神的健康と密接に関わることが予想される。そのため，完全主義の不適応的な側面（完全主義的懸念：ミスに対する懸念）と精神的健康の関連を不確実さ不耐性が媒介すると予測した。さらに、本研究では、共通性回帰分析（Nimon, Oswald, & Roberts, 2012）を用い、完全性追求とミスに対する懸念の共通要素、独自要素が持つ影響も検討した。

【方法】小学生未満の子どもがいる母親（500 名，M = 35.0 歳，SD = 4.8）を対象とした web 調査を実施した。測定尺度は、MPS-J（桜井・大谷, 1997）20 項目より、完全性追求とミスに対する懸念に因子負荷が高い項目 9 項目とした。6 件法で測定した。不確かさ不耐性（竹林他，2012）を 5 件法で測定した。抑うつは THI（青木他，1974）を 3 件法で用いた。人生満足度（Diener & Diener, 1995）日本語版を 7 件法で用いた。子育てストレスは、宮田（2002）を 4 件法で用いた。

【結果と考察】　相関係数を確認すると、高目標設置やミスを気にする傾向は不確実さ不耐性と関連していた。高目標設置は心理的適応と関連は認められなかった一方で、ミスを気にする傾向は抑うつや育児ストレスと正の関連、人生満足度と負の関連があった。

さらに高目標設置→不確実さ不耐性→心理的適応、ミスを気にする傾向→不確実さ不耐性→心理的適応の媒介過程を確認した。人生満足度、抑うつに対しては、高目標設置は部分媒介の効果が、ミスを気にする傾向では完全媒介の効果が認められた。育児ストレスについては、ミスを気にする傾向でのみ完全媒介の効果が認められた。

さらに、共通性回帰分析によって、高目標設置とミスを気にする傾向の影響を確認したところ、不確実さ不耐性と育児ストレスについては、高目標設置の独自効果が認められないことが明らかになった。その一方で、ミスを気にする傾向の独自効果と、両者の共通性効果も認められた。この結果を受け、ミスを気にする傾向に着目した媒介分析を実施した。なお、この際、高目標設置によって統制することで、共通性効果をコントロールした。

分析の結果、ミスを気にする傾向は人生満足度と抑うつについて部分媒介効果を示し、育児ストレスについては完全媒介効果を示した。本研究の結果は，母親の不適応的完全主義と精神的健康との関連を報告した研究（Lee et al., 2014）や，不確実さ不耐性が精神的健康の脆弱要因となることを示した研究(Dugas, 2004)と一致する。これらの結果は，不確実さ不耐性が不適応完全主義と心理適応との間の重要なメカニズムの一つである可能性を示している。今後、完全主義と不確実さ不耐性の関連を調整する要因を明らかにする必要がある。

以上、主たる研究を示した。完全主義と言っても、完全主義的努力：高目標設置と完全

主義的懸念：ミスを気にする傾向により、その影響が異なることが明らかになった。
　その他にも、複数の研究を実施し、今後、これらの研究をもとに、以下の２点について研究を引き続き実施している。
１）育児バーンアウトについての検討
　現在、育児バーンアウトについて翻訳、尺度構成を行っている。一部の結果はすでに公開された（Kawamoto et al., 2018）さらに、今後国際調査への参加を通して、通文化的な妥当性を検証する
２）育児情報収集の媒介過程、ならびに完全主義の調整過程の検討
　育児情報収集と適応については正の関連が認められている（現在、未発表）そのため、完全主義→育児情報収集→適応の媒介過程の確認が必要になる。特に完全主義的努力→育児情報収集→適応の過程、さらに、育児情報収集と適応の過程を調整する完全主義的懸念の影響を検討する予定である。

５．主な発表論文等（研究代表者は下線）
〔雑誌論文〕（計３件）

1. Kawamoto, K., Furutani, K., & Alimardani, M. (2018). Preliminary validation of Japanese version of the Parental Burnout Inventory and its relationship with perfectionism, Frontiers in psychology, DOI: 10.3389/fpsyg.2018.00970
2. 西村 太志，古谷 嘉一郎，長沼 貴美（2018）.居住地の社会増減率と親との居住距離が子育てに関する評価に及ぼす影響 応用心理学研究，*43*，277-278.
3. Kawamoto, T., & Furutani, K. (2018). The mediating role of intolerance of uncertainty on the relationships between perfectionism dimensions and psychological adjustment/maladjustment among mothers Personality and Individual Differences *122* 62-67.

〔学会発表〕（計９件）

1. 古谷嘉一郎（2015a）．完全主義が子育て情報収集行動に及ぼす影響 日本グループ・ダイナミックス学会第 62 回大会
2. 古谷嘉一郎（2015b）．完全主義認知が子育て情報収集行動に及ぼす影響―分位点回帰分析と重回帰分析― 日本社会心理学会第 56 回大会
3. 古谷嘉一郎・西村太志（2015）．子育て完全主義と完全主義認知の関連～乳幼児を育てている母親を対象とした検討～ 日本パーソナリティ心理学会第 24 回大会
4. 古谷嘉一郎・西村太志・相馬敏彦・長沼貴美（2015）．完全主義、情報収集志向性と精神的健康-乳幼児を育てている母親に着目した検討- 日本心理学会第 79 回大会古谷嘉一郎（2016）．子育て中の母親における受容的サポートの影響ー完全主義の二次元モデルを調整要因とした検討ー　日本社会心理学会第 57 回大会
5. 古谷嘉一郎・西村太志（2016）．　子育てにおける「社会的代理人」選択に関する検討（2）-自尊心と一般的信頼が代理人選択に及ぼす効果- 日本応用心理学会第 83 回大会
6. 古谷嘉一郎・清水裕士（2017）．子育て中の母親における Web での育児情報収集 無制限複数選択法のデータによる探索的因子分析での検討　日本発達心理学会第 28 回大会
7. 古谷嘉一郎（2017）．完全主義と社会的サポートが親バーンアウトに及ぼす影響　乳幼児を養育している妻に着目した検討　日本グループ・ダイナミックス学会第 64 回大会
8. 古谷嘉一郎（2017）．子連れの迷惑行為に対する迷惑度に子育て経験が及ぼす影響　日本心理学会第 81 回大会
9. 古谷嘉一郎（2017）．ワークライフバランスと職務満足感、キャリア計画性、育児展望の関係性 ―育児中の働いている夫婦を対象とした検討―日本社会心理学会第 58 回大会

〔図書〕（計２件）

1. 古谷嘉一郎（2017）．人と人とのつながりがもたらすもの エピソードでわかる社会心理学(pp. 130-131) 北樹出版

2. 古谷嘉一郎（2017）．人をつなぎ、社会をつむぐモノ エピソードでわかる社会心理学(pp. 174-175) 北樹出版

〔その他〕
ホームページ等
1. https://researchmap.jp/kaichiro_furutani/
2. https://sites.google.com/site/kaichisspace/home

６．研究組織
(1)研究代表者

古谷嘉一郎（Furutani Kaichiro）
北海学園大学・経営学部・講師
研究者番号：80461309

(2)研究協力者
〔その他の研究協力者〕

川本大史（Kawamoto Taishi）
中部大学・人文学部・講師
研究者番号：50761079